

Title	一、一八五四年の外交革命
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.131(629)- 147(645)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

海外史壇紹介

一、一八五四年の外交革命 田中 荆 三

外交革命なる語は、十九世紀の外交史に於ては、ビスマルクがその權力を失つた後に、三國同盟に對し、三國協商の成立を見んとした時期をさしてしばしば用ひられたのであるが、グラズボー大學の G. B. Henderson 氏はクリミヤ戰爭に際し、オーストリアにより外交革命がなされたことを American Historical Review Vol XLIII No. 1 に於て表記の題目にて論じてゐる。之に關しては、大に異論のあるべきことと思はれるが、この論文に於ては從來クリミヤ戰爭に關する多くの史書に於て等閑に附せられてゐた點を述べてゐるので、ここにその大要を紹介する。

彼は先づ (一) 四綱領 (The Four Points) 即ち所謂『四大保障』に於て、本問題の再考を要する理由を述べ、一八五四年八月八日に東方問題に關し四綱領よりなる覺書が英佛墺間に成立せし事情を (二) 『一八五四年十二月二日の條約に關する商議』に於てオーストリアの外交革命を成就せしめた事情を、(三) 『條約の意義』に於て、この外交革命の結果を述べてゐる。

一、四綱領

海外史壇紹介

一八一五年のウィーン會議に列席せし政治家達により作成されたヨーロッパの協調は、クリミヤ戰爭中に、最後の破綻を來たした。この協調は長年解體すべき徵候を示しつつも、一八四〇年四一年に於ける海峽問題(佛に對し英墺露土が争ふ)を重大なる危機に至らしめずして解決する等成功してゐるのである。ビスマルクが『ヨーロッパに三十年の平和をもたらした制度』と云つてゐるこの協調は、正確にはヨーロッパの協調ではなく、外交に於て共同の利益のためと云ふよりも自由主義に反對する王國、ロシア、プロシヤ、オーストリアの間に結ばれた永久的な同盟であつた。然して之等の諸國は現状維持により利益を得て居り、それ故革命に反對したのみならず野心的な外交にも反對した。このやうな現状維持の運動に於てヨーロッパ五強國の中三ヶ國が結合してゐることは、平和の攪亂に對する永久的な保證であつた。

この東部の三強國の結合は——このときなほ神聖同盟と云つてゐるが——多分一八四九年にハン

ガリー人の叛亂を鎮めるために、ロシヤがハプスブルグ家の王國を援助した時最高頂に達し、翌年オルミュッツに於て、ロシヤの優勢が全ヨーロッパに示された。(ロシヤがオーストリアに味方せんとする態度を示したためプロシヤのオルミュッツの屈伏となる)オーストリアの多くの政治家達は、ロシヤの援助にも拘らず、却つてこの援助のために、オーストリアがロシヤの從屬國に過ぎないものとなることの危険を感じた。それ故彼等はロシヤより遠ざからんとし、一八五三年にロシヤ皇帝がオーストリアの協力を得んとした時之を拒絶し、一八五四年には十二月二日にロシヤの敵と同盟するまでにいたつた。その結果は一八一五年の制度である現状維持に努力する五國の協力は止み、外交革命となり、十年たらずの間に、ドイツ

の統一、イタリーの統一、ナポレオン三世の没落となつたのである。

之等の驚くべき事件を可能ならしめたロシヤ、オーストリア、プロシヤ間の同盟の崩壊について歴史家は奇妙にも無視してゐた。そして歴史家の興味は主として、クリミヤ戦争の責任は誰にあるかと、イギリスは悪い馬に賭けたかと云ふことに集中せられてゐた。之等の問題には多くの困難がある。第一に結論が、この人、或はあの人、この國、或はあの國に特に責任がある譯でないといふ否定的になりがちであるからである。第二にそれは最後の決定を缺き、常に概して意見の相違を残すからである。之等の問題のために、歴史家はクリミヤ戦争の間に行はれた商議とそれに續いて起つた外交革命を振り向かなくなつたのである。それでここにこの問題を再考することの必要がある。

一八五三年にロシア皇帝ニコラスは英佛との争が激しくなつたので東方問題についてオーストリアの援助を得んとして、先づ奥帝フランス・ヨゼフに説いてボスニヤ・ヘルツェゴヴィナの二州をとらしめ、モルダヴィヤ、ワラキヤ兩公國をとつたロシアと同様の政策をとらしめんとした。之に失敗すると、ニコラスはオーストリアとプロシヤを好意ある中立におかんとして、フランス・ヨゼフに『我々を脅かしてゐる共同危機に直面して、我々三國を力あるものにしておくか、四十年來のヨーロッパの幸福を保證した、同盟を力あるものにしておきたい。同盟をなくして最も恐ろしい混亂狀態に陥れて良いであらうか。』との手紙を出すと共に、オルロフを使節として、オーストリアに、一八四九年のロシアの援助の代償として戦争に際して好意ある中立を宣言すべきことを求めた。之に對しフランス・ヨゼフは若しニコラスがバルカ

ンに於ける現状維持を正式に保證するならば好意の中立を宣言すると答へた。オルロフはそれは不可能であると答へ、ウインを去り、次いでベルリンに赴いたが、ベルリンに於ても成功しなかつた。ニコラスがトルコの現状維持を保證することを拒絶したことはフランス・ヨゼフに惡印象を與へ、彼をして益々——ロシアはバルカンに於けるオーストリアの自然の敵であり、そして來るべき衝突はオーストリアの利益になるやうにせねばならぬ——と云ふ見解を有する反露的なプオル、ヒュンブナー・ブルック、プロチツシュ・オステンなどの連中に近づかしめる結果となつた。然し、軍部のものは概してロシアに好意を寄せてゐたため、フランス・ヨゼフの見解は動搖しがちであり、ニコラスも一八五四年六月三日附のロシアは公國より撤退すべし、とのオーストリアの要求を受取るまでオーストリアがロシアに敵意を有すること

を信じなかつた。

ロシアの敵はオーストリアを彼等と密接なる同盟に結びつけんとした。そして一八五四年の二月と三月に英佛奥普の間に、トルコの保全と二公國よりの撤退を要求する條約に調印せんとする商議がなされた。この計畫はなほ平和を維持せんとするロシアの態度により失敗に終り、英佛のみが一八五四年三月三十一日にロシアに宣戰した。西方に於て英佛は同盟し、そして東方に於てロシアと戰つてゐた。中央に於てオーストリアとロシアは孤立を感じ、四月二十日、ロシアがロシアの攻撃に對しオーストリアを援助すべき條約に調印した。ロシアに更に干與する意がなかつたため、以後の主なる外交活動は、西方諸國がオーストリアを戰爭にひきこまんとする努力と、オーストリアが一戰をも交へずしてロシアを讓歩せしめ戰爭を終局に導かんとする努力であつた。

クリミア戰爭中に於けるオーストリアの目的は便宜上消極的目的と積極的目的とに別たれる。オーストリアはロシアと妥協することを拒絶し、そしてニコラスが喜んで提供せる勢力範圍を得た。それ故オーストリアは、オーストリアにとつて危険なるバルカン半島にロシアが覇權を振ふことを阻止したので積極的な利益を得た。然しオーストリアが例によつて不活潑であつたことは、この場合オーストリアの利益のやうに見えた。英佛が戰爭にまきこまれてゐるのに、オーストリアは欣然として他の國によつて戰はれてゐるオーストリアの戰爭を見て居た。然し乍ら一八五四年の六月と七月に、ロシアの二公國よりの撤退とドナウ河の自由のために戰ふ準備あることを示した。英佛がオーストリアを味方にひきいれんとしたのはこの積極的利益を誇張することによつてであつた。オーストリアの主要なる消極的利益は戰爭を局限

し、そしてその目的を限定するにあつた。若しオーストリアが戦争に加はつたならば、オーストリアは直にその存在にかかはる争に従事しなければならなかつた。オーストリアは一八四八年の革命の直後にもう一つのヨーロッパの騒ぎを経験するを好まなかつた。それ故一八五四年六月三日オーストリアはロシアに二公國より撤退を要求したが、それがためロシアが宣戦布告をなしはしないかと危んだ。オーストリアにとつて、若し大戦争になつたならば、オーストリアが損失者となるより他ない、限りなき戦争にまきこまれないやうに聯合國の戦争目的の限界を定めんとすることが必要であつた。之が一八五四年の六月と七月に於けるオーストリアの外交の主要なる目的であり、同時にオーストリアがロシアと戦ふ場合の英佛の攻守同盟を要求する結果となつた。

然る間にフランスの外相ドルーイン・ド・リュ

イスは友好的なる佛墺同盟が、勢力均衡をフランスに有利に變ずると考へ、フランスの外交に必要なであると考へた。それ故七月の初にパリに於てリュイス・ヒューブナー、トウヴネルの間に商議が行はれ、平和の基礎となる有名なる四綱領の最初の形が作られた。この平和條件を議定書になしウィンに於て調印せんことを、フランスはイギリスに申し出たのであつたが、イギリスの内閣は、五時間を費し審議した後、それはイギリスの將來の商議の自由を妨げるとの理由のもとに、三國同盟案に反對してしまつた。以後しばらくの間、佛墺はイギリスを加へた同盟を成立せしめんと努力したのであるが、オーストリア宰相ブオルの態度に疑を持つイギリスは容易に承認しなかつた。この時佛墺により同意せられた豫備條約は次の如きものであつた。(一)四綱領を基礎として且つ商議を行ふことなしには如何なる商議をもロシアとな

さざることを、(二)オーストリアは二公國を占領すること、(三)その結果、奥露が戦ふ場合、西方諸國はオーストリアに武力援助をなすことを約す。(四)この條約に他のヨーロッパの宮廷の同意を得ること。この條約によりウィン政府が二國よりロシア軍を撤退せしめるために戦ふ用意あることを確にしてゐるのであつた。

七月二十九日にいたつてイギリスの内閣は覺書の交換と、條約案を考慮しオーストリアを參戰せしめるために、二つの些細なる變更を條件として條約案を受諾するに決した。かくして、同盟條約が成立せんとした時に、オーストリアにとり條約より魅力ある事件が起つた。それはロシアが公國より撤退を開始したのであつた。ブオルは退却が平和的であり、完全である事が確實となるまで決定を延期せんとして、その餘裕を得るために、英國のなした變更に對して技術的な反對をなした。

この報知を受取り當惑せるフランス政府は、イギリスにその修正の放棄を説いた。八月五日にいたりブオルは英佛大使に向ひ、オーストリアはロシアが公國より撤退しつつあるのではない事が明白になつた時に於て初めて條約に調印する事を聲明した。このブオルの態度に英佛大使は大に憤り、佛大使は四綱領を具體化する覺書の調印に反對したほどであつた。然しフランス政府は大使のとれる斷乎たる處置に反對し、覺書の交換をなす權限を佛大使にあたへた。イギリスも又この四綱領を受諾せざるを得ぬ事態におかれたのであつた。

八月八日にロシア大使ゴルチャコフはブオルに向つてロシア皇帝が公國よりの完全なる撤退を命令せることを傳へた。然し乍らブオルは聯合國の大使に、彼が直に覺書の交換をなす準備あることを語つた。かくしてゴルチャコフの言葉により同盟條約に調印せずして覺書の交換をなしたのであ

る。それ故八月八日にオーストリアの外交は二重の勝利を得た。ゴルチャコフの發表はバルカンに於けるオーストリアの權益が安全であり、しかも

戰爭をせずして得られたことを意味した。その上オーストリアはヨーロッパ内のトルコとロシアの間に軍隊を入れることにより、地域的に戰爭を制限したのみならず四綱領により戰爭の目的をも制限した。八月八日の覺書に示されてゐる如くに四綱領は次のことを宣言してゐる。(一)二公國に對するロシアの保障がヨーロッパの保障に代へられざるとき、(二)ドナウ河が自由にせられないとき、(三)一八四一年の條約がヨーロッパの勢力均衡に關係ある總ての調印國により協力して改訂せられないとき、(四)トルコ領のキリスト教徒がロシアの保護の下より寧ろヨーロッパの保護の下におかれざるときは、『ロシアの帝室とトルコ政府との間の關係は強固なる永續的基礎の上に確立する

ことが出来ないことは三強國の意見を等しくするところである』と。

オーストリアは今や部分的に英佛と歩調を等しうした。然し外交革命は半ば完成したのみである。英佛は、戰爭目的の限定を以て、オーストリアの參戰により償はるべき彼等の讓歩であると見做した。オーストリアはロシアの二公國よりの撤退を聯合國が感謝すべきであると勝手に解釋したが、聯合國の意見は、八月八日の交渉を不十分であるとし、條約の本質的な部分即ち三ヶ國間の條約は消滅したと考へた。次の四ヶ月にオーストリアをして覺書の交換に初まつた交渉を完成せしめるため連續數個の豫備條約を作成し十二月二日の條約を調印せしめた。

二、一八五四年十二月二日の條約に關する

商議

覺書の交換により四綱領が國際的重要性を得る

や、西方の諸國がこれを最後通牒の形式をもつて傳達せんことを希望せるに反し、オーストリアは之をおだやかにロシアに通達し、然もブオルは、若しロシアが四綱領を受諾するに於ては、ロシアは『海員審判所に誠實なる代表を送り、同一基礎に立つて、交渉を開始する事に賛成し、軍事行動の同時中止を決議する我々の熱心を期待すること出来る』と約束した。かくの如くにオーストリアはなほ露普奥の舊同盟に好意をよせて居り、英佛奥の新たに締結せんとする同盟に期待して居なかつたのである。

一方に於てリュイスは一度失敗せる條約案を再度提出し、オーストリアを參戦せしめんとした。イギリスも、『第一に、オーストリアは主として今ロシアが撤退しつつある二公國に利害關係を有してゐる。それ故に若しオーストリアを中立から引き出すとしたならばより誘惑的なる好餌を提供し

なければならぬ。第二に、大分以前より英佛間に決してゐるクリミヤの遠征隊は今や出發せんとしてゐる。この遠征の危険なる性質はオーストリアの援助を必要としてゐる。』の二つの理由のもとにその外交方針に變化を來し、クラレンドンはウエストモerlandに向つて同盟條約に努力することを命令し、そして『英佛政府は覺書によつて得られた條件に喜んで同意すること……それはロシアとの商議の基礎と見らるべきこと』を傳へた。然し乍らオーストリアは疑惑の眼を以つて、戦争の場合オーストリアにとり利益なき遠い半島に派遣せられる聯合國の軍隊の出發を傍觀して居り、聯合國が熱心になればなる程回避的となつた。英佛政府は間もなくフランスにより作られた條約草案に同意した。然しその案が論究の問題となるや否や、大體そのやうな計畫に好意を持つてゐたヒューブナーも彼の政府がそれを受け入れさうもない

ことを宣言した。反つてオーストリアは公國の占領の準備をなし、ポーランドの國境より軍隊をひきあげ、八月八日以來の西方諸國との疎隔を増しつつあつた。リュイスもカウリーに向ひ、『オーストリアに條約の調印を強要すべきでなく、英佛はオーストリアの申出を待つべきである。……若しセント・ピーターズブルグに於て、我々の要求を支持した結果、ロシヤ皇帝の憤怒をオーストリアがかき立てたならば、そしてロシヤの代理人により敵意を傳へられ、或はオーストリア領のスラヴ人種をオーストリアより離脱せしめんとしたならば、オーストリアは初めて條約を要求するであらう。そして二國はその條件を課することが出来るであらう』と語り、條約草案を保留しておいた。

リュイスの豫期せる事件は間もなく起つた。八月十八日に、駐露オーストリア大使エステラージがロシヤ首相ネッセルロードにブオルの四綱領

をロシヤに承認せしめんことを求めた電文を傳へた所、ネッセルロードは『あなたは我々が公國より撤退する犠牲に對し何をもつて報ゆるか。我々がオーストリアの希望をいれたのに、どうしてあなたは新らしい讓歩を要求するのか。それが正しい事であらうか』と云ひ、ロシヤ政府の四綱領を拒否する決心の堅い事を示した。ニコラスの如きはオーストリアに對し宣戰することさへ主張したのであつたが、僅にネッセルロードの『若し今オーストリアに宣戰したならば、我々は三國を相手にする代りに全ヨーロッパを相手として戰はなければならぬ』といふ意見により思ひ止つたのである。九月一日にいたりロシヤが四綱領を正式に拒絶したことをイギリスに傳へられた。この時にクリミヤ遠征隊が將に出發せんとして居り、イギリスはオーストリアをして參戰せしめる條約に努力するに決した。然しこのイギリスの努力は、時

には威嚇を以てさへなされたのであるが、オーストリアの參戰を好まざる態度により全く失敗に終り、反つてオーストリアと西方諸國とを疎隔せしめる結果にさへなつた。然しこの疎隔も數日に過ぎずして、クリミヤに於ける事局の急速なる進展と一層早い噂の傳播とは同盟條約を再び商議せしめる結果となつた。

ブオルは西方諸國に對し大膽なる外交をなしたけれども、彼には多くの心配があつた。彼はオーストリアがバルカンに於けるロシヤとの妥協を拒絶する限り、兩者間の疎隔すべきことを知つて居り、ドイツ聯邦に於ける支配權の争に於て、プロシヤがオーストリアを凌ぎはせずと懸念してゐた。オーストリアが同盟國を持たずに、イタリーに於けるフランスの陰謀、スラヴ諸州に於けるロシヤの陰謀、溫和になつたハンガリー運動等に脅かされることを心配してゐた。それ故彼は良かれ悪

しかれオーストリアの安全は西方諸國と密接なる同盟を結ぶにありと信するやうになり、九月二十六日には皇帝の同意をも得んとして『我々の必要としてゐる平和は海軍國との同盟によつてのみ得られる。ロシヤは我々に平和を決して與へないであらう』との意見を發表してゐる。このブオルの努力を助けたのはクリミヤに於ける戦争の進展であつた。聯合國の軍隊は抵抗を受けずに上陸し、九月二十日アルマの合戦に一見決定的と思はれるほど素晴らしい勝利を得た。この報知につゞいてセバストポール陷落の誤報が傳へられ殆んど一般的に信せられた。ブオルはパリとロンドンに祝電を發し、オーストリアは日ましに、西方諸國にとり一層望ましい同盟者となつた。

ブオルは時機を失せず、直に外交交渉を開始し、十月二日英佛政府に向ひオーストリア駐在英佛大使により、若し西方諸國によつてブオルに申出あ

らば直にブオルが受諾するであらうとの確信をもつて作られた豫備條約を通達した。この草案は英佛大使により作成せられたるも事實はオーストリアの計畫であつた。然しブオルはこの草案を英佛政府によつて拒否せられ、ために外交的冷淡さを増すべきことを恐れ、彼の同意せることを祕してをいた。このブオルの態度が變更されんことは聯合國の政治家の希望する所であつた。從來の外交交渉に於てオーストリアの態度に敵意を感じてゐる英のクラレンドンは『ブオルは攻守同盟を發表した。然し（セバストポール陥落の）ニュースが總て誤りであることが明かになつたならば、オーストリアが如何なる手段をとるか私は興味をもつて見よう』と書いてゐる。この冷淡なる態度に困惑せるアバーデーンは、クラレンドンの同盟條約の申出を失望せしめないやう宮廷より説得せられんことを求めた。クラレンドンは頑強であり、豫

備條約が到着しても和解せずして、女王に向ひ『條約はオーストリアを何等拘束してゐない。その限りに於て役に立たないけれども、若し同時にブオルにより提出する必須條件が四綱領を討議するためウイン會議を再開すると云ふのでなければ採用してもよからう』と書き送つてゐる。事實彼は彼の頑強なる態度を會議の問題に徐々に集中しつゝ、あつたが、強要せられて遂に心ならずもオーストリアとある種の條約を締結する考になつた。一方フランスに於ても同様の經過をたどつてゐる。リュイスはカウリーに向つて『彼も皇帝もその提議は厭うべきものであると思つた。それは眞劍に受理され得ない』と語つてゐる程であつた。然しトウヴネルは『若し我々がオーストリアに對しあらゆるものを拒絶したならば、オーストリアは我々から去るであらう。——そして今提議せられてゐる條約は聯合國に直接の利益はないけれども、そ

れはオーストリアをより密接に我々に結びつけ、あらゆる事件に於てロシヤに敵對せしめるやうになる』と説いた。この言が效を奏し、リュイスとカウリーはそれに對する提議をなすのが最善であると云ふに同意した。十月十日に女王はクラレンドンに向ひ『クリミヤに於ける成功(アルマの戰)はヨーロッパの同盟を強固にすることを伴ふべきである。さもないとそれは實なき勝利となつてしまふであらう』と指摘した。これによりクラレンドンもいやいやながら同盟條約を受諾するやうになつたやうに見え、十月十二日にフランスの對案が到着した時には、それを受容する氣持になつてゐた。

十月十七日イギリスの閣議に於て、ウィン會議再開を主張せるフランスの對案を考慮した。その時は、『とにかくこの提議を拒否しないと云ふ以外には何も決しなかつた。』十月二十日の閣議に於

て、クラレンドンが『その目的として將來の協力に對する期待をもつよりもはつきりせる諒解を有するオーストリアとの條約を結ばんとする熱心なる希望を表現すべき』ことを決した。然して同時に四綱領について更に商議することはイギリスが反對であることを指示した。イギリスの大臣達はより和解的な態度を採用する一方に於て、既に成り立せる計畫を考へることは出來ぬとて、ブルカネー・ウェストモerland條約案を友好的に拒否した。然してアバーデーンは『會議再開に反對する理由は決して條約に反對する理由ではない。そしてオーストリアと聯合國との關係が早く適當に規定せられれば、せられるほど良い』と云つてゐる。

同時にオーストリアに於ては、ブオルはロシヤに對し容赦なく壓迫する方針をとり、十月二十二日に軍隊は戰備につくことを命ぜられた。この動員の目的は、軍事的でなく外交的であり、ロシヤを

して四綱領を受諾せしめんとしてなされたのであり、戦争の季節が過ぎるまで延ばされてゐたのであつた。プオルは戦争に加はることなしに戦争を終局に導く希望を増し、そして、西方諸國のロシヤに對する法外なる要求を阻止し得ることを希望して、該草案を拒否した。

このころ英佛奥に於ては、ある條約が調印さるべきであると云ふ意見が増しつゝあつたが、それに對する主なる難點は、言葉の適した形を見出すことであつた。ここに於てフランスはもう一つの案を出した。この條約案は十一月一日にワレフスキによつてクラレンドンに渡された。この草案は巧に、イギリスが曩に反對せる點を削除することなしにこれを巧に祕して置いた。四綱領は再び確認せられたが、曖昧なる文句に於てであつた。即ちそれは媾和が來年の四月までに四綱領を基礎として作られなかつたならば、『締盟國は再び同盟

の目的を達成する爲に最も有效なる手段を協議する事に賛成する』と云ふのであつた。クラレンドンもこの改訂により、新らしい草案に賛成し、十月二十三日のクリミヤに於けるイギリスの指揮官の『クリミヤに於て我々は從來保持してゐた地位を維持して居るのみ』の報告により、イギリスの大臣達はオーストリアとの條約がクリミヤの軍隊を救ふ唯一の手段であると感じてゐた。ここに於てイギリスの賛成を得たフランスの條約案がウインに送られた。

かかる間に外交の事態は急速に變化しつゝあつた。第一にロシヤが遂に四綱領を受諾せんとしてつあることが明になつた。第二にドイツ聯邦に於ける長びいた商議が明白にある結論に達しつゝあつた。第三に苦戦して勝利を得たインケルマンの戦と、クリミヤに於ける増しつゝある困苦と不規律の報告は聯合國の政治家の信念を覆しつゝあつ

た。八月八日以來プロシヤのフレデリック四世とロシヤの宰相ネッセルロードはニコラス皇帝に、四綱領を受諾すべきを説き、ロシヤが斷乎として四綱領を拒絶した後にもその努力をやめなかつた。然もクリミヤに於ける聯合軍の成功と十月二十日のオーストリヤの動員は遂にロシヤをして受諾せしめることになり、今や四綱領は總ての交戦國により受諾せられ、オーストリヤの動員はその目的を達した。この十一月の間に聯邦諸國の間に於て、オーストリヤが英佛の陣營に加はり、外交革命を完成させるか、或はドイツ諸邦によつてオーストリヤが中立に加へられ、そして多分（戦争の終つた時に）新にせられた神聖同盟國にひき戻されるかが問題となつてゐた。オーストリヤはプロシヤの好意ある中立の保證なしに行きすぎることはなく、プロシヤは四月二十日の條約以來更に保證することはなかつた。オーストリヤの目的は

プロシヤ及びドイツ聯邦によりオーストリヤの公國占領に對する保證を得ることであつた。遂に十一月二十六日に商議は成功し、プロシヤは保證をなし、フランクフルト議會に於てオーストリヤの意向を支持するに同意した。プロシヤは西方諸國に對しオーストリヤを妥協的地位におくことを希望したのであつた。之等の事情が商議せられつつある條約に大なる影響を與へたのであつた。

ブオルは、英佛より送られた條約案に對し二つの重大なる變更をなした。即ち第五條を『若し四綱領を基礎とする媾和が、「今年の中に」（來年の四月までにの代りに）保證されなかつたならば調印國は直ちに同盟の目的を達する最も有效なる手段に就て協議すること』となしてゐる。又ブオルは若し平和が一月までに恢復せられなかつたならば軍事商議が直に調印國の間に開かるべしとの祕密條項を附け加へてゐるのである。之等二つの修

正により、ブオルはオーストリアをして戦争に際しても、平和に際しても、優越的地位におくものと考へたのである。英佛はこの變更の受諾に躊躇したのであるが、クリミヤの情勢は之を受諾せざるを得ないやうになつてゐた。遂に、ブオルより正式に英佛政府にオーストリアの條約が提出せられ、十二月二日佛墺英の代表により正式に調印せられた。

三、條約の意義

この條約の批判せられる條項は第一條と第五條である。第一條は、調印國は四綱領を確認し、更に全歐洲の利益のために更に條項を出す權利を保有すと述べ、更に豫め商議することなしに如何なる商議もロシヤとなさざることを規定してゐる。第五條は若し今年の終りまでに媾和が第一條に基いて得られないならば、調印國は彼等の目的を得る最善の手段について熟慮することを規定してゐる。

るのである。この條項をフランスが起草した時には、最善の手段は、オーストリアの最後通牒により惹起される戦争であつたのである。然し乍ら調印の日までにロシヤは無條件に四綱領を受諾してしまつた。それ故、この條約の前文に、同盟の目的を『現在の戦争を出来る丈早く終局し、一般的平和を再建する』にあるとしてあるので、目的達成は戦争によらずして商議により得られるのであつた。

イギリスの政治家は最後まで商議を避けんことを希望したのであるが、ロシヤの頑迷により、四綱領は受諾せられずと考へこの條項に同意したのであつた。ロシヤが豫期に反して和解的であり、そしてオーストリアと商議に協力するに活動し初めた時に、イギリスの大臣は——實際には彼等が欺瞞に失敗したことを意味するのであるが——欺瞞されたことを感じた。イギリスに於ては條約を性急にすぎたものと考へられてゐたのである。

之に反してフランスに於てはこの條約は歓迎せられた。ナポレオン三世はこの報告を受取ると喜びのあまり皇后と相擁し、この條約に努力せるブールカネーに勳章を授けたのであつた。イギリスとは反對に、フランスがこれを歓迎したのは、一八一五年以來フランスを阻止するのを主要目的とした北方の同盟を終局に導き、長年の希望を實現したからであつた。フランスは遂に希望せる外交革命を成就し遂にウォータールー以來フランスを束縛してゐた同盟制度の羈をたつたのである。

オーストリアに於ては輿論は十二月二日の條約に賛成した。有力なる親露黨は之を嫌ひ、汎獨黨はプロシヤを棄たことを怒り、西方同盟の支持者さへも屢々條約が充分に行はれてゐないと考へ、多くの非難が有つたのである。ブオルとしては同盟によつて、バルカンに於けるオーストリアの利益を保つ平和を得んとしたのであつた。然し乍ら

ブオルの政策には致命的なる缺點が有つた。それはメッテルニヒが『あらゆる行動の結果がブオル伯より隠されてゐた。彼は物事に直面せる時何れが正しいか知つてゐた。然し將來のことについては何も知らなかつた』と評してゐる如く、ブオルの政策は表面優れたものであつた。ロシヤと對抗し二公國を占領し、プロシヤに對しては條約をもつて保證せられ、海軍國と同盟し、戦争は終局に導かれんとする状態にあり、彼の目的は達せられるかの如くに見えた。

ロシヤに於ては、皇帝ニコラスはオーストリア皇帝フランツ・ヨゼフを殆ど父の如き愛情を持つて見てゐたのであるが、この條約に對し大に憤り、これまで彼の書齋を飾つてゐたフランツ・ヨゼフの像をウィーンに送り憤りを示した。彼はエステラーギーに向つて『ポーランドの最も馬鹿な二人の王は誰であるか』と聞き、そして、『それはヨハン・

ソビエスキ―と自分である。それは二人共オーストリアを助けたからである』と云つたと誌されてゐる。彼は數ヶ月後に死んだが、その臣下のものはオーストリアの忘恩が彼を殺したのであると考へた。二十年後にキヅアに有名なる騎馬旅行をせるバーナビーは『私のロシヤを旅行してゐる間、私はオーストリアとドイツに對する——オーストリアのクリミヤ戰爭の間になした行爲が惡感情として残つて居り——敵意をあらゆる階級のものによつて示されるのに驚いた』と書いてゐる。この感情はロシヤ内のみならず、他國に於けるロシヤの友人の間にも存してゐた。例へば、ソルズベリーは一八七六年に記してゐる『如何にニコラスが叛亂せる王國に於て、如何なる他の君主もかつて示さなかつた勇敢さを以て、無償でフランス・ヨゼフを恢復せしめるに助力したかを、そして如何にフランス・ヨゼフが一八五四年の忘恩を以て彼に償

つたか』をビスマルクが如何に熱心に述べたかを。ここにブオルが豫知しなかつた外交革命の結果があつた。ブオルの政策によりオーストリアは一八一五年以來殆どたえず結ばれてゐた二つの同盟國を失ひ、その代りに永久的でない同盟を得、一八五九年一八六六年の結果となるのであつた。

二、ハンザ研究の現状

近山金次

神聖ローマ帝國が衰微して行くにつれて北ドイツ諸都市に於ける商工業階級の間には獨立的機運が動き、強大な團結力が構成されることとなつた。かくて成立せる『ハンザ』なるものは其の貿易が北はロシヤより南はスペインにまで及び、ヨーロッパ各地と直接交渉を有ち、實に中世末期のヨーロッパに於ける重要な紐帶であつた。それ故ハンザの歴史は常にドイツ史の一部門たるに止まるもので無く、ヨーロッパ史の重要な一部を構成するものである。ヨーロッパに於て最近二十年間と云ふもの此のハンザに關する研究は特に活氣があつた様である。斯學の權威たるベルリン大學教授 W. Vogel 氏は一九三七年春 *Revue Historique* 第一七九卷に於てハンザ研究の現状を左の